

倉敷伝建地区の歩み

いあいさつ

大森久雄先生の著作を「備中倉敷学」から出版させていただくに当たり、ご挨拶申し上げます。

「備中倉敷学」は、平成十七年十月に発足。倉敷公民館において毎月一回、講演会を開いております。平成二十六年初頭に百回を超えました。

大森久雄先生は当会発足当時から、顧問としてご協力を頂いております。講師の先生を選任する作業において、的確なアドバイスを頂戴しました。また、ご自身も何度か演題に立たれました。あるとき、私から先生に「美観地区（伝建地区）のことを書いて頂けませんか」とお願いしました。先生は「なんとかやってみましょう」という運びになりました。

出来あがった本書は、一般の方にも分かりやすい簡潔な文章です。更に、例えば「倉敷と空襲」などで、従来は常識とされてきた伝聞や言い伝えに対しても正確な論述をされておられます。本書は、伝建地区の歴史を語る上で必読の書であります。

残念ながら、大森先生はこの原稿をまとめられた後に入院され、療養中であります。そのため入力と写真や表などの資料挿入は、大賀久正氏、工藤博氏、砂川恵輔氏、大塚文子氏のご協力を得ました。また、最終的な校正は山本太郎氏、宇野忠義氏、渡辺隆男氏、吉原睦氏にお世話になりました。紙面をお借りして、皆様に心から御礼を申し上げます。

最後になりましたが、大森久雄先生のご回復をお祈りいたします。

目次

はしがき	7	幕末期の文化	39
倉敷史を調べた人々 (一)	9	東町の道しるべ	41
倉敷史を調べた人々 (二)	11	重胤と節齋	43
くらしき	14	陣屋炎上	44
水夫屋敷	15	打ちこわしとええじゃないか	46
村の寺社	18	無段名人 ブー	48
除風と元禄俳壇	20	倉敷県	50
赤腕恐るべし	22	阿智神社と鶴形山	50
村の助け合い	24	阿智神社の祭り	53
古禄新禄の争い	26	橋の由来	56
村の教諭所	28	東山の岩場	58
井上家の歌人	29	キリスト教と倉敷	59
永言社の人々	31	倉敷丸	61
風牀の詩風	33	倉敷紡績所	62
芸道の諸相	35	日露戦争、日本海海戦の砲弾	63
寂厳	38	米騒動	64

呉服商の誓文払い	65	小豆擦り	97
文化都市の系譜	70	伝建地区の歩み 略年表	98
大原美術館開館	72	あとがき	111
おいまの井戸	74		
山川均と菊栄	76		
倉敷と空襲	78		
木野山様	79		
民藝館と考古館	81		
芭蕉堂	82		
古い町に注目	85		
倉敷が全国に	86		
県下最上の観光地	88		
保存行政の広がり	90		
まちや賞	92		
登録文化財	94		
屏風祭	94		
住民の手で	95		

伝建地区は江戸時代の倉敷村であり、明治以後の村町市制の中心地であった。現在は俗に美観地区と呼ばれ注目されている。

この『倉敷伝建地区の歩み』は『新修倉敷市史』全十三巻を基にし、項目別の通史にした。そのため、史料文献はいちいち記入していない。巻末に略年表を付した。

また、とりわけ文化史に目を向け、やや詳しく説明した。

平成二十六年（二〇一四） 三月

大森久雄

はしがき

わが町、倉敷の伝建地区の歩みをまとめた。

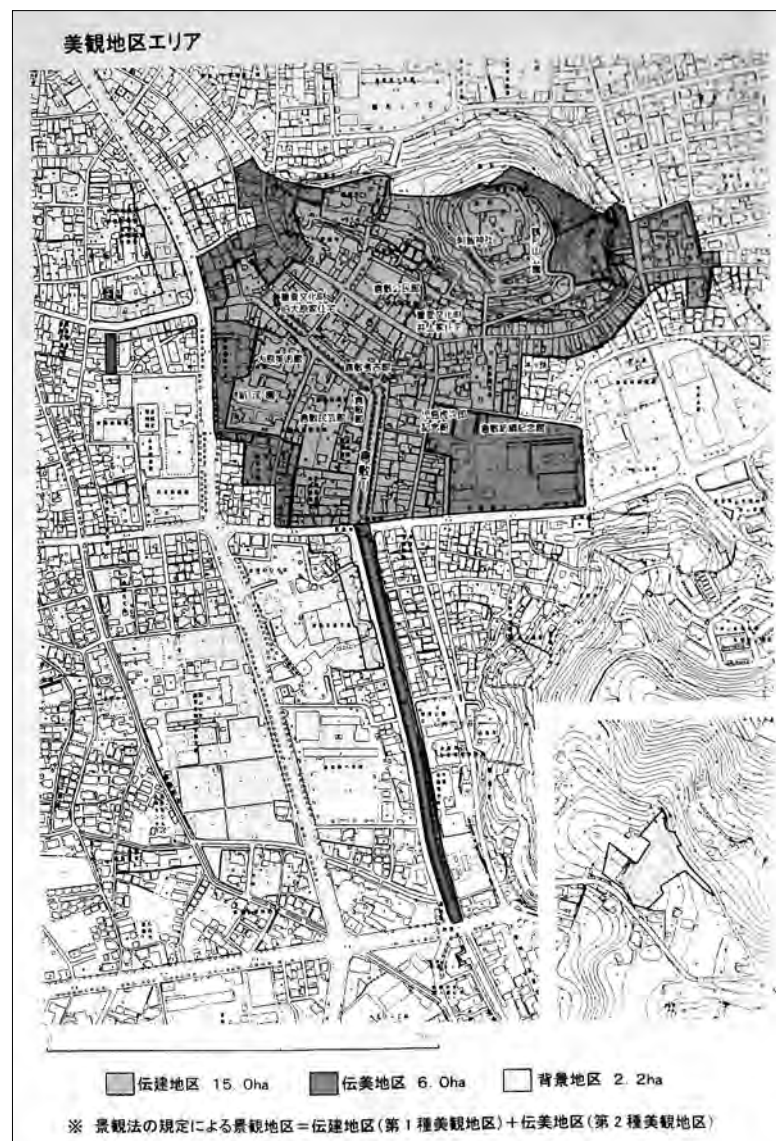
伝建地区とは、昭和五十三年（一九七八）九月に作られた「倉敷市伝統的建造物群保存地区保存条例」（伝建条例）という保存地区である。東町、本町、中央一丁目、阿知二丁目に及ぶ（地図参照）。市の町並み保存行政では、国の景観法に基づき、保存地区を次のように区分している。

● 景観地区

第一種美観地区（伝建地区）

第二種美観地区（伝統美観保存地区。伝美地区）

● 背景地区



美観地区エリア

倉敷史を調べた人々（一）

江戸時代から明治中期まで、倉敷の歴史を調べた人はいない。幕末の『備中集成志』や『備中誌』に地名、寺、社の略記が見えるくらいである。

明治末期、東町の雑穀商大森一治おおもりいちじが郷土史研究を提唱し実行した。大正七年（一九一八）、木山巖太郎いわたろう著『倉子城史談』くらしきだんが発行された。まとまった倉敷史の初めといえる。その沿革分野は大森が集めた資料によっていて堅実である。他の分野は著者所蔵史料が多用され、日野屋木山家のお家自慢が目立つ俗書になっている。

大正十五年（一九二六）皇太子来町に際し、井上伯一編『倉敷町沿革史』が出版され、町は『倉敷町勢要覧』を献上した。後者の沿革編は大森が執筆した。

昭和二年（一九二七）、倉敷町は万寿・大高両村と合併した。合併前の町政関係者により、倉敷自治顕彰会が作られ、会長原澄治はらすみじの提唱を受け、合併前の町史編集が始められた。

県師範学校教諭永山卯三郎ながやまうさぶろうに話が持ち込まれた。永山は多忙のため、菅正十郎かんしょうじゅうろうを紹介した。菅は地元の大森と協力し史料調査に取り組んだ。

数年後の昭和八年秋、江戸時代に長く庄屋を勤めた紀国屋小



『倉子城史談』（岡山県立図書館所蔵）

野家の文書が公開された。その整理、解読中に大森は没し、その後、菅は町・市史稿を執筆した。しかし、戦争の時代にもなり、刊行されなかった。

戦後、菅も没した。永山は合併町村史を含め、市史原稿を作り、市当局に出版を迫った。それが昭和三十五年(一九六〇)から保存版二十五冊として発行された。永山著となっているのは正しくない。江戸時代の年代記は菅の市史稿そのままであり、文芸分野は大森執筆稿である。

これが、後、倉敷地方史研究会(会長 宗沢節雄)により訂正され索引がつけられ、昭和四十八年(一九七三)全十三冊として名著出版から発行された。ここでは永山編著となっている。

永山は戦前、吉備考古会により遺跡、遺物の調査を進めた。『岡山県通史』・『岡山県金石史』(昭和五年)『吉備郡史』(昭和十二年)などにまとめられた。戦後、鎌木義昌が市内の貝塚を発掘し、倉敷考古館に勤めた。その後、間壁忠彦・葭子まかべただひこが館を継ぎ、精力的に調査・研究に取り組む。その成果は『倉敷考古館研究集録』(同四十一年創刊)に収められている。

倉敷市は埋蔵文化財調査を教育委員会文化課で行った。平成五年から倉敷埋蔵文化財センターが担当している。

この間、倉敷出身の社会主義者山川均の自伝(『ある凡人の記録』昭和二十六年、後の『山川均自伝』昭和三十六年)や若き学徒、内藤正ないとうせいしゅう中の「備中倉敷に於ける新緑・古緑の抗争」(同二十八年)等の論文が発表

された。

角田直一かどただい著『倉敷浅尾騒動記』(昭和三十九年)は立石孫一郎らの代官陣屋襲撃事件の経過を丁寧ていねいに追い、文学の香り高い歴史叙述とともに出色の仕上がりになっている。

歴史家によるものではないが、異色な郷土読本とも言うべき歴史書が、倉敷市の教職員を中心にして、倉敷教員組合の発行により出版された。倉敷郷土誌編纂委員会編『伸び行く倉敷』(昭和二十七年)である。

戦後の社会学の研究調査を踏まえた歴史と産業、生活、文化について広く把握しており、社会教育の素材として普及するものとなった。

倉敷史を調べた人々 (二)

大森の後を継いだのは、東町の骨董商、温故堂の黒川清一である。物知りで憶えがよく、実地調査を重視し、『倉敷歌人伝』(昭和三十八年)等を著した。

昭和三十九年(一九六四)、角田、黒川、原三正ら倉敷地方の郷土史家により、倉敷史談会が作られ、『倉子城』が発行された。



『倉子城』創刊号



角田『倉敷浅尾騒動記』



永山編著『倉敷市史』



大森『倉敷町史編輯日記』
(倉敷市所蔵大森家文書)

次いで昭和四十六年には市文化連盟から『倉敷春秋』が出され、倉敷が観光地になる動きと併せて、郷土史再発見、流行期に入った。同五十五年には倉敷地方史研究会の『探古』も創刊された。三誌へのこの地にかかわる主な執筆者は（表1）のようである。

この間では、三宅千秋著『倉敷の干拓』（昭和五十一年）、竹中正夫著『倉敷の文化とキリスト教』（同五十四年）が労作である。

また、井上賢一著『倉子城遺聞』（昭和五十六年）や森田平三郎著『倉敷雑記』（同）、芳本重次郎著『備中の倉敷こぼれ話』（平成十二年）が出版された。井上雄風は市内外の石造物の拓本集成に取り組む。資料として貴重である。

平成元年（一九八九）倉敷市は児島、玉島との三市合併二十周年を記念して、新しい市史編集を始めた。市史編さん室が置かれ、専門の職員、執筆者が選ばれ、精力的に取り組まれた。研究の成果は紀要『倉敷の歴史』（同三年創刊）に反映された。同六年（一九九四）『新修倉敷市史』が発行され、同十七年（二〇〇五）に全十三巻が完結した。執筆者により組織された倉敷市史研究会の部会ごとに討議された提出原稿は、編さん室の職員が史料に基づいて点検をし、正確が期された。史料編、通史編に大別され、お互いの関連も取られ、自治体史としては出色のできになっている。

最新の研究では、市史編さん実務を担当した山本太郎著『近世幕府領支配と地域社会構造』（平成

二十二年）が貴重である。岡山大学、倉敷市所蔵小野家文書、大橋貞吉家文書などを精査、分析し、美作から備中、讃岐、伊予に及んだ倉敷代官所領の支配の仕組みの特色を実証している。また、吉原睦著『倉敷美観地区―歴史と民俗―』（同二十三年）は寺社、年中行事を詳しく述べている。倉地克直・山本太郎・吉原睦著『絵図で歩く倉敷のまち』（同二十三年）は江戸時代の絵図と現在の姿を対照させ、カラー写真を多用し、分りやすく正確な案内をしている。

（表1）『倉子城』などへのこの地にかかわる主な郷土史執筆者

池内節光	井上賢一	井上雄風	小野一臣	小野敏也	河原 近
黒川清一	千田英夫	中村 哲	浜田初男	原田和美	間壁忠彦
三宅敏夫	森 章	森田平三郎	森脇正之	安原秀魁	芳本重次郎



『倉敷春秋』創刊号



『新修倉敷市史』

〈前近代〉

くらしき

伝建地区は戦国時代末まで海であり、今の鶴形山は小さい島であった。

天正期（一五七三～一五九二）宇喜多家により、早島から帯江間に潮止め堤防が築かれた。宇喜多堤と呼ばれる。その後、江戸時代初期の元和期（一六一五～一六二四）にかけて、干拓、開発が進み、海は平野になった。その干潟は阿知潟あちがたと呼ばれた。小さな島は山となり、その南側や、児島湾に通じる汐川しおかわ（現 倉敷川）の回りに人々が住みついた。

この集落は、くらしきと呼ばれた。地名の由来はよく分らない。倉敷とは、そのころ、莊園や公領から領主へ納める年貢などの貢納物を保管する倉庫の敷地を指した。

新見荘の史料の永禄期（一五五六～一五七〇）に「くらしき」が見える。それを直ちに、わが倉敷とは決めにくい。

天正期（一五七三～一五九二）の小早川隆景の書状に「蔵敷」が見え

る。そのころ、宇喜多家と戦っていた毛利家が、今の鶴形山辺りに兵站補給地を置き、蔵敷と呼んだようだ。

江戸時代初め、慶長十四年（一六〇九）水夫屋敷の記録に「倉敷」が見える。この地が確実に倉敷と表わされる最初である。人口は六百人から八百人と推定される。

元和期（一六一五～一六二四）には、倉や船の倉も建てられ、水夫・船倉屋敷を中心に町並みが作られた。他村からの移住者も増えた。

関ヶ原の戦の後、倉敷は備中国奉行小堀政次、政一（号 遠州）に支配された。

元和三年（一六一七）から備中松山藩池田長幸、長常に支配された後、寛永十九年（一六四二）、幕府領になった。（表2参照）

古新田や、後新田などが開発され、新田を併せ持つ村になる。行政上は村であり、住民の中心は百姓である。しかし、実際には町並みのある町であり、住民の多くは商工業を営む町人であった。

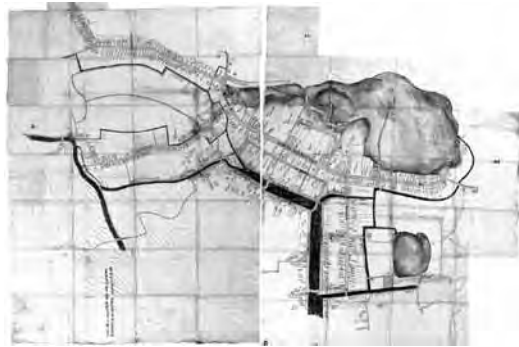
元禄八年（一六九五）の町委細帳には、前年の調査で石高千八百八石、かまど数九百十二（家数五百九十八）、人口二千八百七十四人とあり、大村になっている。

水夫屋敷

江戸時代初め、この地には児島湾へ通じる汐川があり、その川辺に水夫屋敷が建てられた。水夫

（表2）倉敷村の領主

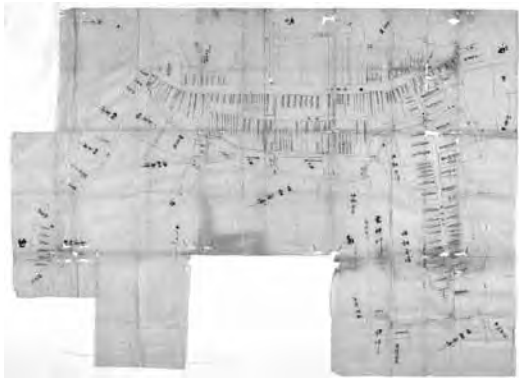
西 暦	年 号		領 主
1600	慶長 5	幕府領	備中国奉行 小堀正次 政一（遠州）
1617	元和 3	備中松山領	大名 池田長幸 長常
1642	寛永 19	幕府領	代官 米倉重種 他
1683	天和 3	庭瀬藩領	丹波亀山城主 久世重之
1697	元禄 10	丹波亀山藩領	丹波亀山城主 井上正岑
1702	元禄 15	幕府領	代官 大草正清 万年頼忠
1710	宝永 7	駿河田中藩領	代官 内藤弼信（かずのぶ）
1721	享保 6	幕府領	代官 遠山重祐 他
		以後幕末まで同領	



宝永7年(1710)倉敷村屋敷割絵図
(倉敷市所蔵小野家文書)



宝暦3年(1753)村絵図(倉敷市所蔵小野家文書)



水夫屋敷図(倉敷市所蔵小野家文書)

とは船乗り、屋敷とは検地で田や畠ではない住民の居住地を指した。小屋掛けのような家が並んでいたであろう。

水夫は、日頃は暮らしに要る物資を運んだ。文禄・慶長の役に動員されたとも伝わる。大坂の陣や島原の乱には、幕府の軍事米や物資を運んだ。そのため水夫屋敷は年貢を納めなくてよかった。

江戸中期、倉敷村は内海の主な航路から外れ、水夫の役割は小さくなった。水夫屋敷へ地子銀もかけられるようになり、家はしっかりしたものに建て替えられ、商人・職人が住み着いた。これが倉敷の町並みの原形になった。

町の動脈は汐川であった。江戸時代初め、それまでの滞^{みお}を利用し、高梁川から用水を引き、元和期(一六一五〜一六二四)に舟を通す川として作られた。寛文期(一六六一〜一六七三)には川幅が村内では三〜十間半と定められる。

元禄期(一六八八〜一七〇四)には水運が盛んになる。米、雑穀、大豆、小豆、綿実、繰り綿などが積み出され、干鰯^{ほしか}、竹木、薪、炭、塩、藁、果物、小間物、荒物などが運び込まれた。今の美観地区の川沿いはそれらを積み卸した作業場で、雁木^{がんぎ}が作られた。

年貢米は児島郡天城村まで小舟で運ばれ、積み替えられて同郡村まで中型船で運ばれた。そこでさらに大型船に積み替えられ、大坂や江戸へもたらされた。

年と共に川は埋もれた。享保期(一七一六〜一七三六)から浚渫を幕府に願ったけれど認められない。そのため、安永期(一七七二〜一七八一)以降、村の総力で川ざらえが行われた。下流の他領の村が付け洲を作り、川幅が狭くなるため紛争が絶えなかった。

神田には年貢がかからない。

元禄期、神輿が作られ、九月一日の祭りにそれが村内を巡行する神事行列も始まった。

中後期、それは行列も整い盛大に行われた。そこには素隠居すいんきょが同行した。普通の隠居との意味で、じいさん、ばあさんの面をかぶる若者という。戎町の沢屋善兵衛夫妻が年を取り参列できなくなったので代参させたと伝わる。面の形から、じじ・ばば、らっきょうとも呼ばれ、そのうちわでたたかれると賢くなるそうだ。

寛延三年（一七五〇）、本社が再建された。妙見菩薩も開眼され、妙見宮は村の氏神として祀られる。本社のある山は妙見山みょうけんやままた宮山みややまと呼ばれた。

天明元年（一七八一）には祭りに檀尻が登場する。寛政期（一七八九～一八〇一）には三代の代官が灯籠を寄進している。

幕末には『備中誌』で、実にこの国の一大祭



本栄寺



誓願寺



地藏院



教善寺



観龍寺



長連寺

村の寺社

元禄期（一六八八～一七〇四）の倉敷村には、七寺、七堂、十七社があり、山伏が八人いた。

七寺とは、誓願寺（浄土宗）、南之坊（浄土真宗）、本栄寺（日蓮宗）、観龍寺（真言宗）、観音坊（同）、清鏡寺（同）、地藏院（同）である。その後、玉泉寺（真言宗）、長連寺（曹洞宗）が建てられた。南之坊は後に教善寺と改称し、安永期（一七七二～一七八一）、現在地へ移転した。観音坊、清鏡寺、玉泉寺は現存しない。

七堂は地藏堂等、十七社は惣堂大明神社等の小社、山伏八人は、天台宗本山派五人、真言宗当山派三人である。村内には小神社が多くあり、山伏も活躍した。

村の産土神うぶすながみとしては妙見宮みょうけんぐうがあった。もともとは観龍寺の鎮守であり、同寺の南下手、今の駐車場辺りに小社があった。北辰妙見説により、北極星の本地とされた妙見菩薩みょうけんぼさつを祀り、村の有力者が宮みやの当人とうにんとして管理した。また、木綿ゆたすきとと呼ばれた当番が毎年交代で祭祀を受け持った。

元和期（一六一五～一六二四）、観龍寺が別当として祭祀を行うようになり、後、寺の東の山上に本社が建てられ、拜殿もできた。境内と

であると、その祭りが評されている。

江戸時代には人々はどこかの寺院に檀家として属した。檀那寺は檀家がキリスト教徒や日蓮宗不受不施派ではないことを請け負った。出生、奉公、旅行、結婚、移住などによる出入り、死亡が宗門帳に記録された。人々を支配する働き的一端を寺は担っていた。

元禄期（一六八八～一七〇四）石塔墓が造られた。享保期（一七一六～一七三六）には、年忌、命日法要のため、過去帳が作られ、仏壇が広まる。寺と人とは先祖供養と葬式を通じて結ばれ、寺は檀家の菩提所となり、寺参りは墓参りと同じ意味になった。また、寺は集会の場で情報が交わされた。

除風と元禄俳壇

元禄期（一六八八～一七〇四）松尾芭蕉の門人の各務支考らが倉敷に来て、蕉風の俳諧を広めた。地元では除風が活躍した。

賀陽郡八田部村（現総社市）出身の真言宗の僧侶で、本町弓場の清鏡寺に住んでいた。この寺の跡へ、今は祇園社が建てられている。

元禄中期、除風は都宇郡下庄村の南瓜庵へ移る。滞在十年。その



清鏡寺の石段



素隠居面

間に、句集『青むしろ』を編み、同庵西の四つ堂前に芭蕉墓を建て、奉納句を収め千句塚とした。除風の影響で倉敷村の庄屋、紀国屋小野家に俳人が続出した。まず、露堂、名は助右衛門。分家して野田屋。宝永三年（一七〇六）三月、支考が主催した京都での芭蕉十三回忌に除風と共に参列し、芭蕉木像を求めた。

涼しさや 小石をつたふ 遠千濁 露堂

ついで素秋。露堂の弟で名は孫太夫。句集に『桃の寝覚』

鳥洗ふ 飛汁かかる すみれかな 素秋

また、祝邑が出る。露堂の子で二代目助右衛門。後、野田屋十郎左衛門貫雄を名乗る。

闇けれど にほひを追ふて 梅の花 祝邑

その弟に稚志がいる。名は諸雄。後、田辺屋権右衛門また、伊予屋泰夏を称する。和歌も好くした。

涼風の 何処をそよぐや 暮の月 稚志

小野家以外には、大島屋簀里。名は重右衛門。

磯ちかき 夕日にけしの 乱哉 簀里

その他、葛屋岡家に故構、紙屋武部家に青楮らがいた。



下庄の四つ堂